

男装朗読劇 『復讐のモーツァルト』

・演出 春田鮎



登場人物

黒崎琵琶音 (くろさき びおん)・・・天才バイオリン奏者
白川鍵斗 (しらかわ けんと)・・・孤高のピアニスト
海原航進 (うなばら こうしん)・・・エメラルド号の船長
金城豪 (かねしろ ごう)・・・若手実業家 エメラルド号のオーナー
青島奏季 (あおしま そうき)・・・エメラルド号専属のチェロ奏者
紅堂歌郎 (くどう うたろう)・・・エメラルド号専属の歌手
水良美佐十 (みずよし みさと)・・・三ツ星シェフ ゲスト料理長
成上夢男 (なりあげ ゆめお)・・・音楽プロデューサー
葉山露濤 (はやまる みお)・・・男装の貧乏探偵
江口慧 (えぐち けい)・・・露濤の相棒 女好き
鹿島竜樹 (かしま りゅうき)・・・刑事 露濤たちとは腐れ縁

◆プロローグ

素晴らしいバイオリン協奏曲が大きなコンサートホールに響き渡る。
鳴り止まない拍手喝采。

黒崎琵琶音の控室。遠くに聞こえる喝采。
一息つく天才バイオリニスト、黒崎琵琶音。
そこにプロデューサーの成上夢男が入ってくる。

成上「やあ、琵琶音、お疲れ様。すごい歓声だぞ、聞こえるだろ？」
琵琶音「ああ、聞こえてるよ」

成上「ついにやったな、スペースホール3日連続公演。大、大、大成功だぞ、琵琶！あはははは！やったな、おい！・・・どうした、つまらなそうな顔して。これはお前が考えてるより快挙だぞ。クラシック界を変えるんだよ、お前と俺なら絶対できる！そう思わないか？」

琵琶「変えてどうするのさ？僕は自分の音楽を追及したいだけだよ。それ以外の事は」

成上「馬鹿言うな。今日のコンサートはスペースTVでも放送されるし、開演前からCDもバカ売れだ。もうお前の音楽はお前ひとりのものじゃないんだぞ」

琵琶「だけど、成上さん、あなたのもでもない。奇抜な装飾や華美な演出は本当に必要なのかな？ヒットソングのカバーや、良く知りもしない歌手とのコラボレーションも」

成上「今さら何を言うんだ。お前だって納得していたはずだろう？」

琵琶「初めはね。だけど、名前が売れたら本来の音楽活動をしていく約束だったよね？」

成上「ああ、そうだ。だが、ここまで来るのに俺がどれだけ苦労したか分かってるのか？金だっただれだけかかって」

琵琶「わかってるさ。だけど、もう十分じゃないか？」

成上「琵琶・・・お前」

琵琶「次の仕事であなたとのエージェント契約は終了にさせてもらおう。僕は僕の本来の道へ戻るよ。悪いけど」

部屋を出ていく琵琶。

成上「・・・えらそうな口をききやがって・・・何様のつもりだ・・・」

◆第一楽章

夜、豪華客船の甲板。

出航のレセプションパーティー。

上機嫌でお客様に挨拶する、エメラルド号船長の海原航進。

海原「みなさん、ようこそ、わがエメラルド号へ。船長の海原です。この船は明日の朝、世界7か国に寄港する世界一周の船旅へとみなさんをお連れします。どなたさまも、心行くまでこの旅をお楽しみください。船内は贅の限りを尽くしております。もちろん自慢の料理もご堪能ください。なんと今回の料理長は特別ゲストとしてこの方をお呼び致しました。パリに於いて、日本人初の三ツ星レストランを経営するオーナーシェフ、水良美佐十シェフです」

大きな拍手。

水良「こんばんは、水良です。今回は古くからの友人である海原船長のたつての要請という事で、

乗船を決めました。お蔭で、パリにある自分の店は、旅を終えたところにはつぶれているんじゃないかと気が気ではありません」

笑い声。

水良「それは冗談ですが、すでに世界中の美味しい料理を食べてこられたであろう皆さんに、失望をさせないよう頑張つて厨房に立ちたいと思います。船代は安くありませんものね」

更に大きな笑い声。

水良「どうぞよろしくお願いします」

拍手。

海原「水良シェフ、ありがとうございます。ちなみに我々クルーの食事は、社員食堂です」

笑い声と拍手。

海原「そして今回の船旅の目玉はもうひとつ。今や飛ぶ鳥を落とす勢いで人気沸騰中の天才バイオリニスト、黒崎琵琶音による船上コンサートです！」

歓声。

海原「なんとそれだけではありません！黒崎琵琶音とは対極にあるといわれるもう一人の天才、孤高のピアニスト、白川鍵斗とのジョイントコンサートが実現しました！」

大歓声。

海原「さあ、皆さん、明日からの素晴らしい船旅の安全を祈して、乾杯いたしましょう。グラスの準備はいいですか？それでは、乾杯！」

一同「乾杯！」

嬌声と笑い声。盛り上がる甲板。

場違いな場ながら楽しむ貧乏探偵・葉山露澤と相棒の江口慧。

露漑「すごい豪勢だなあ。見て見て、あのおばさん、頭に鳥が乗ってる！」

慧「ばーか、ただの羽飾りだろ！あんまりキヨロキヨロすんなよ、みつともない」

露漑「しかし、あるところにはあるんだな、お金って」

慧「まったくだな。あ、お兄さん、シャンパンちょうだい。だけど俺たちはこの船に乗って何をすればいいわけ？」

露漑「さあ？よく分からないんだけど、何かあったら改めて指示するって、ほらこの手紙」

慧「ふーん、おかしい依頼だな。船に乗るだけで20万、港に着くたび10万円か。悪くはないけどね」

露漑「悪くないどころかメチャクチャいいだろ！先月の俺たちの売上知ってるか？チツ！・・・まあ、保険みたいなもんだろ。何も起きなきゃそれでいいし、何か起きたら動けばいいと。あ、お姉さん、ちよつと待って、そのフルーツちょうだい！わお、旨そうなメロン」

慧「事件が起きそうってだけじゃ警察には頼めないし、こんな妖しい依頼うける探偵事務所なんて俺たちぐらいか」

露漑「ま、そういう事だな」

慧「で？依頼主って誰なの？」

露漑「封筒の裏見てみな」

慧「ん？これか・・・黒崎琵琶」

露漑「ああ、この船旅の目玉商品」

慧「驚いたな、何があるんだろ？」

露漑「さあな、スターにはスターの悩みつてのが、あ！ローストビーフ！」

慧「・・・は〜」

演奏家たちの控室。

チェロの青木奏季とピアノの白川鍵斗が待っていると、歌手の紅堂歌郎が駆け込んでくる。

歌郎「すみません、お待たせしました！」

奏季「馬鹿野郎、こんな大事な時に遅れて来るやつがあるか！すみません、白川さん、こいつの遅刻癖にはほとほと手を焼いてるんです」

歌郎「本当に申し訳ありませんでした！またこの時計が狂ってたみたいで」

奏季「時計のせいになれば済むってもんじゃないだろ！？だいたいお前はいつもいつも」

鍵斗「まあ、いいよいいよ。あいつもまだ来てないし、次からは気を付けて」

歌郎「はい、気をつけます！」

奏季「だけど、感激だなあ。まさか白川さんや黒崎さんと一緒に演奏できるなんて。夢にも思っていないませんでしたよ」

歌郎「本当に。お二人のジョイントコンサートの話を聞いた時も驚きましたが、まさかこの船の専

属の僕たちを使っていただけなんて、本当になんてお礼を言っていないやら」

鍵斗「いやいや、お礼なら俺以外の人間に言ってくれ。俺は共演者の採用には何も関与していない」
奏季「それでもですよ。だってお二人なら、いくらでももつと有名で優秀なメンバーを呼ぶことが出来たはずでしょ？」

歌郎「そうですね。それなのにNGを出すことも無く共演させていただけるなんて・・・僕、歌手生命をかけて歌わせていただきます。よろしくお願いいたします！」

鍵斗「おいおい、大げさだなあ、まあとにかく頑張ろうよ。いい演奏をしてお客様に楽しんでもらおう」

奏季「はい。頑張ります！」

そこに琵琶が入ってくる。

琵琶「お疲れさま」

奏季・歌郎「お疲れさまです！」

鍵斗「よお、琵琶。久しぶりだな。3年ぶりか？」

琵琶「ああ、ウイーンのコンクール以来だ。鍵斗、本当に、よく来てくれた」

鍵斗「まさかお前が俺を指名してくるなんて思わなかったから少しびっくりしたが。テレビや雑誌で活躍は見せてもらってるよ。忙しそうだな」

琵琶「忙しいだけさ。このままじゃ、腕は落ちる一方だ」

鍵斗「まさか。お前ほど才能がある奴はいない。俺が言うんだ、間違いない」

琵琶「才能だけならそうなのかもな。だが音楽家としては君の方が上さ」

鍵斗「俺の方が上？冗談言うなよ。たしかに俺とお前は学生時代から、楽器は違えども事あることに比べられ、競わされ、勝手にライバル扱いされてきたが、俺は自分がお前より優れた音楽家だなんて思ったことは一度もない」

琵琶「だが君は音楽に愛されている。今も昔は。それに比べて僕は・・・音楽に恨まれてるんだ」
奏季「音楽に恨まれてるって・・・いったいどういう意味ですか？」

琵琶「え？・・・いけない、大切なメンバーを放ったまま議論してる場合じゃないな」

歌郎「黒崎さん、この度は本当にありがとうございます！必ずやご期待に添えるように」

琵琶「期待なんてしていない」

歌郎「・・・え？」

鍵斗「おい、琵琶」

琵琶「僕が今回、鍵斗に来てもらったのも、君たち若手と共演することにしたのも、原点に戻りたかったからなんだ」

奏季「原点？音楽のですか？」

琵琶「ああ。僕は有名になったけれど、そのために大切なものを失ってしまったような気がする。だからこの旅で、それを取り戻したいんだ。堅実にピアノと向き合い続けてる鍵斗、そしてまつす

ぐ未来を夢見てる、数年前の自分と同じ目をした君たちと共演することだね」

歌郎「・・・感激です！僕もうなんていうか、うう・・・(泣)」

奏季「おい、泣くなよ、俺まで・・・(泣)」

琵琶「泣いてる暇はないよ。始めようじゃないか」

鍵斗「そうだな。時間もあまりないことだし、まず演奏曲の打ち合わせを。このリスト通りで間違いないか？」

歌郎「あの、このリストには無いのですが、オーナーからのリクエストで、ぜひモーツァルトの“魔笛”を演目に入れて欲しいとのことですよ」

琵琶「魔笛？・・・歌曲だけど、君、歌えるのかい？」

歌郎「はい、一応は・・・うう、すでに緊張してきた・・・歌えるかな」

鍵斗「おいおい、頼むぞ(笑)」

奏季「がんばれよー」

琵琶「復讐の炎は地獄のように我が心に燃え・・・か」

そこにエメラルド号のオーナー、若手実業家の金城豪が入ってくる。

金城「みなさん、お揃いのようですね」

歌郎「オーナー、お疲れ様です！」

金城「君たち、迷惑はかけてないか？」

奏季「はい、今のところは大丈夫かと・・・」

金城「ははは、まあ、今回はお二人の胸を借りるつもりで励んだらいいでしょう」

奏季・歌郎「はい！」

鍵斗「金城さん、この度はありがとうございます。精一杯、演奏させていただきます」

金城「黒崎さん、白川さん、この度は依頼を受けていただき、本当にありがとうございます。ついに私の夢がかなう時が来ました。一流の音楽家による船上コンサート・・・あいつにも見せてやりたかった・・・」

琵琶「あいつ？」

金城「あ、いえいえ、さあ、甲板の方へどうぞ。出航前の前夜祭、どうぞ羽を伸ばして楽しんでくださー」

◆第二楽章

次の日の朝。

出航したエメラルド号の甲板。

慧が煙草を吸っている。実は禁煙中の露瀼。

慧「ふー、昨日はよく飲んだなあ・・・大海原で吸う、朝の一番は格別だあー」

露漉「おい、慧、煙草ならあつちで吸え！煙がこっちにくるだろ」

慧「知るかよ、自分が動けばいいだろ」

しぶしぶ移動する露漉。

露漉「おい、やつぱりこっちに来るぞ！わざとだろ、わざと！」

慧「ばーか、風の仕業だろ？なんで俺がわざとそんなことするんだよ」

露漉「お前は俺が禁煙中で苦しんでるのを面白がってるんだ！お前はそういう奴だ、この薄情もの！」

慧「禁断症状でイライラするからって人にあたるんじゃないやねえよ。そんなにイライラするなら禁煙なんかやめちまえよ、どうせ三日も持たないんだから」

露漉「うるせえうるせえ！・・・あー、もういいか！？やめたやめた、吸っちゃう、もう吸っちゃう（慧にもらって煙草を吸う）・・・ふー、うめえ！禁煙は陸に戻ってからにしよう」

慧「三日どころか、二日も持たんのかい・・・」

そこに琵琶が来る。露漉を探している様子。

琵琶「・・・葉山さん？」

露漉「ん？・・・ああ、黒崎さんですね？お待ちしました」

琵琶「どうも。今回は、依頼を受けてくれてありがとう」

慧「いえいえ、暇だったんで大丈夫で」

露漉「馬鹿！本当のこと言ってどうすんだよ！あははは、まあ、色々立て込んではいいるんですが、有名人がお困りの様子でしたので調整いたしました。ときどきテレビなんかで見えますよ。大人気ですね、クラシック界の救世主って感じで。あ、握手いいですか？」

琵琶「ははは、やめてくれよ、救世主だなんて。僕には誰も救えやしないさ」

慧「は？・・・はあ」

露漉「それじゃあ、もう少し詳しく聞かせてもらえませんか？手紙の内容だけじゃ要領を得ないのよ。この船で何か起こるんですか？」

琵琶「いや、そうと決まったわけじゃ」

露漉「何か、不安でもあるんですか？この船旅に」

琵琶「・・・不安と言えば不安なんだが・・・取り越し苦労かもしれない」

露漉「取り越し苦労？まあ、それならそれでもいいじゃないですか、話してください」

慧「何もないほうがこっちは楽ですけどね」

露漉「あほ！」

慧「おっと……」

琵琶「実は……僕のプロデューサーが、僕に対して多額の生命保険を掛けてることが分かったんだ」

慧「生命保険？」

露濤「いくらの生命保険を？」

琵琶「3億円」

露濤「3億円……いつごろ知ったんですか？」

琵琶「3日ほど前に」

慧「それで我々に依頼を」

琵琶「ああ。1ヶ月近い船旅の同乗を3日前にOKしてくれる興信所がなかなか無くてね。もうどこでもいいかとあきらめかけてた時、お宅の探偵事務所が引き受けてくれたんだよ」

露濤「ははは……どこでもよかったってね(ぶつぶつ)……それで、心配ってもしかして、保険金目的で殺されるんじゃないかとか、考えてるわけですか？」

琵琶「……まあ、そういうことだ」

慧「だけど、保険を掛けたのって、ご自分のスタッフさんなんですよね？お仕事、一緒にやってきたんでしょう？お名前は？」

琵琶「成上夢男。彼と組んで、もう3年になる。彼の力で今の僕があると言っても過言じゃない。

だけど……」

露濤「だけど？」

琵琶「……彼は僕の音楽を、金のなる道具としか思っていないんだ。僕はもつと本物の音楽をやりたいのに、彼はコマースリズムに乗った、派手で目立って儲けるための、そして……とても醜い音楽を僕に求めてくるんだ……僕はもう我慢できない……だからこの船旅を最後に、彼との決別を決意した」

慧「独立するってことですか？」

琵琶「形は何だつていい。自分が思ったように、自分の愛する音楽を探求できればそれだけで……」

露濤「なるほど……事情は分かりました。とにかく我々はあなたをガードしながら、何か事が起きたら真相の究明に動きます。どうぞ安心して、演奏をしてください」

琵琶「よろしく頼みます。それじゃ、僕はリハーサルがあるので、失礼」

立ち去る琵琶。

露濤「どう思う？」

慧「たしかにありえない話じゃないよな。丹精込めて育ててきたドル箱が突然自分の元を去るってなったら、みすみす指くわえて手放すより、保険金でも手に入れてやろうって考える悪党はいるかもな」

露濤「同感。とにかく依頼人の安全が第一だ。しくじるなよ」

慧「了解」

オーナー室。

談笑する金城と成上。

成上「金城さん、今回はこのような素晴らしい企画をいただき、本当に感謝してます。琵琶もとても喜んでいました。自分にとっても新しい挑戦だと」

金城「それは良かったです。私は海と音楽をこよなく愛しているんですよ。昨年亡くなった妻の父、つまり先代の社長に代わってこの船の事業を受け継いでからというもの、この船は私の分身みたいなものです。一心同体、この船のためにもこのコンサートをぜひ成功させたい」

成上「お任せください。あの二人なら間違いなく素晴らしいコンサートになる事でしょう」
金城「ええ」

そこに船長の海原と料理長の水良が入ってくる。

海原「お呼びですか？オーナー」

金城「ああ、海原船長。水良シェフもご苦労様です」

水良「金城オーナー、船旅はいいですね。当たり前ですが、見渡す限り海、まるでストレスというものがない。この旅の仕事、感謝します」

金城「それは良かった。思う存分、腕を振るってください。あ、紹介しましょう。黒崎琵琶さんのプロデュースをされてる成上夢男さんです」

成上「成上です。黒崎がお世話になります」

水良「はじめまして水良です。私、前々から彼の大ファンなんです。美しいヴァイオリンの音色に加えてあの容姿端麗さ。女性でなくても夢中になるのは当然です」

成上「ありがとうございます。あなたの様な優秀なシェフにお褒めに預かるなんて、プロデューサー冥利につきます」

海原「船長の海原です。どうですか？我がエメラルド号の乗り心地は？」

成上「素晴らしいです、環境もサービスも。海原さんは長いのですか？この船は」

海原「はい・・・まあ」

金城「海原船長は最近、船長になりましたね。前の船長が年のせい、航海中に誤って海に転落しましたね。亡くなってしまいました。それでここは心機一転、若い船長に舵を任せようと、副船長だった海原さんをお願いしたんです」

海原「まだまだ経験が浅い私に務まるのか不安もありましたが、きつとこれもご縁だと思い、思い切ってお引き受けしました」

水良「私は海原船長とは古い友人でしてね。今回、彼に強く勧められて参加することになりました」

金城「最高の音楽には最高の料理を用意しなくては嘘です。知人だと知って、無理を承知で船長にお願いしてもらったんですよ。私はもうこれで、思い残すことは何もありません」

水良「オーナー、何をおっしゃってるんですか。お楽しみはこれからですよ（笑）」

海原「そうですね、大いに楽しみましょう。豪華客船です、まさに大船に乗ったつもりでね（笑）」

金城「そうですね、みんなで力を合わせて、最高の旅にしましょう」

成上「ええ、そうしましょう」

金城「おつといけない、忘れるところだった。新しいバッジを作ったんです。どうか乗船中は、いつも同じエンブレムを胸に輝かせておきましょう。団結の証として」

海原「はい」

水良「いいですね。このデザインは何をモチーフに？」

金城「これですか？これはギリシャ神話の神、セイレーンです」

◆第三章

客船内のコンサートホール。

リハーサル中の琵琶たち。

琵琶「いいじゃないか、さすがだよ、鍵斗」

鍵斗「お前もな。聞き惚れて演奏するのを忘れてしまいそうだ」

奏季「本当に。二人ともどうしてそんな風に演奏できるんですか？まるで十年も一緒に演奏してきたようですよ」

歌郎「奏季、いつまでも感激ばかりしていないで、もっと気合入れて演奏しろよ。お前のチェロ、ときどき走ってるぞ。しっかりしろ」

奏季「わかってる。すみません、琵琶さん、鍵斗さん」

鍵斗「いいよ、緊張してるんだろう。慣れてくればきっと」

琵琶「いや、駄目だ。とくに、32小節目のアラルガンドは恐がってはいけない。アラルガンドはだんだん強く遅くだよ、意味わかってるかい？」

奏季「・・・はい、すみません」

琵琶「謝らなくていい。プロだろう？聞いたことに応えてくれ。32小節目のフィーリング、わかっているのかい？」

鍵斗「おい、そんな言い方」

琵琶「プロなら1ステージ目、一人目のお客から最高の演奏を聞かせなきゃ価値はない。旅の最後に完成したってしょうがないんだ。違うかい？」

鍵斗「それはそうだが、俺らと彼らじゃ」

琵琶「違くない。同じ音楽家だ」

鍵斗「琵琶・・・」

琵琶「少し休もう。その間に仕上げておいてくれ」
奏季「はい！」

出ていく琵琶。

鍵斗「音楽なんて・・・そんなに大切なものか？」

歌郎「・・・なにかおっしゃいましたか？」

鍵斗「いや、いいんだ。じゃあ、やろうか、32小節目」

奏季「はい、お願いします！」

そこに露漉が入ってくる。

露漉「こんにちは」

鍵斗「あ、今はまだリハーサル中なので、すみませんが外で」

露漉「いや、お客じゃありません」

鍵斗「は？じゃあ、何の御用ですか？」

露漉「私、葉山露漉といまして、探偵をやってるんですが、少しだけお話を伺ってもよろしいですか？」

鍵斗「探偵？探偵がいったいなんだってこんなところに」

別室。

露漉「実は黒崎琵琶さんに頼まれてこの船に乗ってるんです」

鍵斗「琵琶に？なんだってそんなこと」

露漉「黒崎さん、この船の上で、ご自分の身に何か起きるかもしれないと心配をされていましてね」

鍵斗「心配？いったい何の」

露漉「殺されるかもしれないと・・・」

鍵斗「・・・君、ふざけてそんな話をしてるなら警備員を呼ぶぞ」

露漉「いやいや、ふざけてなんかいませんよ。事の真相は分かりませんが、彼はそう思ってるんです」

鍵斗「しかしいったい誰に殺されるなんて、あいつは考えてるんだ？」

露漉「プロデューサーの成上夢男さんにです」

鍵斗「なんだって？」

露漉「どう思います？」

鍵斗「どう思うって言ったって・・・ばかばかしい。彼をここまでにしたのは、成上さんだぞ？彼

が琵琶を殺そうとするわけないだろう？」

露濤「仲たがいしてるとしたら、どうです？」

鍵斗「仲たがい？うまく言っていないと言うのか？琵琶と成上さんが」

露濤「らしいです。黒崎さんは成上氏の元を去ろうとしている。それに腹を立てた成上氏が彼に多額の保険金をかけて殺害しようとしている。あくまでも現段階では黒崎さんの想像ですがね」

鍵斗「だからって、どうしてそんな話を俺に」

露濤「何かあつたら知らせて欲しいんです。この船で、彼と一緒にいる時間が一番長いのはおそらくあなただ。それに、友達なんでしょ？黒崎さんの」

鍵斗「俺は・・・俺はあいつの友達なんかじゃない」

露濤「え？」

コンサート会場。

素晴らしい演奏に盛大な拍手と賛美の声。

船内のバーの片隅。聞こえてくる鳴り止まない拍手の音。

密かに会話を交わす船長の海原とシェフの水良。

海原「終わったようだな」

水良「何が？」

海原「コンサートだよ」

水良「ああ・・・ところで、大丈夫なんだろうな？」

海原「問題ない。すべて計画通りだ」

水良「それならいいが。しかし、お前ってやつは本当に腐ったやつだな、ふふ」

海原「お前だって似たようなものだろう？だが這い上がるためには俺は何だっけする。お前だっけそうだろう？違うか？」

水良「いや、その通りだ。ここまで来るのにどれだけ苦労してきたと思ってる。ちよつとつまずいたくらいで、もといたみじめな世界に戻る気はない。決してな」

海原「それで？いくらだったっけ？借金は」

水原「ふん、おおよそ200万ユーロってところか」

海原「日本円にして2億ちよつとか。なんだってそんな大金。商売は上手くいってるように見えただけだな」

水原「表向きはな。だが実際は店は火の車さ。内装も外装も手の込んだモノにしなけりゃ、日本人の俺の店なんて見向きもされない。おまけに社交界やブルジョア相手と付き合うのはいやがおうにも金がかかる。星の数だっけ金次第さ。旨い料理を作っていれば万事うまくいくほど、ヨーロッパってところは甘くはないのさ」

海原「なるほどな。だから俺の持ちかけた密輸の話にも飛びついてきたわけか」

水良「ああ、そうだ。俺とお前は同じ孤児院で育ち、悪事の限りを尽くしてきたが、お互い這い上がるチャンスをつかんだんだ。絶対に手放すわけにはいかない」

海原「その通りだ。俺だって下働きから初めて、ここまで血の滲むような苦勞をしてきた。それがついには豪華客船の船長だぞ？すごいだろ？これで俺は、副船長時代、細々と続けてきた密輸を誰にも邪魔されず、でかい顔してやる事が出来る。しみったれた船長の給料なんか目じゃない。お前と組んで莫大な金を手に入れるのさ。お前をこの船の専属の料理長にする。そうすれば食材を積んだコンテナは武器、麻薬、盗品の絵画だろうとパンダの剥製だろうと、世界中運べないものはないんだ。お前の借金返済なんてあつという間だ」

水良「ああ、頼んだぜ、海原。だが、あのオーナーは本当に大丈夫か？」

海原「心配するな、あんなお嬢さん。女房の父親が死んだあと、わけも分からないまま社長の座についただけだ。いくらだって操れるさ。前の船長が、俺の手でああなったのも気が付かないようなボンクラだからな」

水良「前の船長って？」

海原「ああ、俺がジジイの背中をちょいと押したら、あっけなく海に落ちていきやがった、はははは」

水良「お前ってやつは・・・味方で良かったぜ」

海原「ふふふ」

突如聞こえてくる女性の悲鳴。

海原「なんだ？」

水良「どうしたんだ？なんかあったのか？」

海原「コンサート会場の方からだったな」

水良「ああ」

そこに成上が入ってくる。

成上「あ、海原船長、ここにいたのですか！？大変です！」

海原「あ、成上さん！何かあったんですか？ホールの方から悲鳴のような声が聞こえたが」

成上「ええそれが・・・チェロ奏者の男性が、カーテンコールでステージに戻ってきてすぐ、突然倒れたんです」

水良「倒れた？大丈夫だったんですか？意識は？」

成上「わかりません・・・倒れてすぐ、係員に運ばれて・・・海原船長、皆さんがお探しですよ」

海原「・・・医務室へ行ってくる！」

水良「わかった」

船内の医務室。

飛び込んでくる海原。

立ち尽くしている歌郎と鍵斗、そしてオーナーの金城。

海原「どうしたんだ！？大丈夫か！？」

金城「海原船長……」

海原「オーナー、いったい何があったんですか？……彼は、たしかチェロを担当していた」

鍵斗「青島奏季くんです……」

海原「意識はあるのか？大丈夫なんだろう？おい、青島君？青島君！」

鍵斗「すでに……亡くなっています……」

海原「なんだって？……いったいどうしたっていうんだ？彼は何か心臓かどこかに持病でもあったのか？え？どうなんだ？……オーナー、どうすれば……」

金城「原因は分かりませんが、ステージ上で突然倒れて……即死だったようです。ここに運びAEDによる蘇生も試みましたが……もうすでに」

歌郎「う、うわー！（泣）奏季！奏季！どうしてこんな……どうなってるんだよ！奏季ー！」

鍵斗「船長」

海原「……なんですか？」

鍵斗「コンサート会場がそのままです。おそらく騒然としているはず。観客を客室へ誘導してはどうですか？」

海原「わかりました……」

鍵斗「大丈夫ですか？驚かれましたと思いますが、この船の上の出来事は、船長であるあなたが指揮をとらないと」

海原「わかっています。オーナー、このことはまだご内密に。乗客が不安がりますので。では」

出ていく海原。

海原に電話をする水良。

電話を取る海原。

水良「どうだった？何か問題あったか？」

海原「大変な事になった……演奏者が一人、急死した」

水良「なんだって？何があったんだ？」

海原「わからない、だがこのままじゃ、今後の俺たちの計画にも支障が出るかもしれない。今回も食料コンテナには密輸品を隠してるんだ。不審死となったら警察に船ごと調べられる可能性がある……とにかく今は事の收拾が優先だ。お前も料理で客を落ち着かせてくれ。頼んだぞ」

水良「わかった」

琵琶の部屋をノックする露漉。

琵琶「どうぞ」

露漉「どうも、こんばんは」

琵琶「入ってくれ」

慧「ひえー、やっぱり特等室っていうのは違いますねー。俺たち、2等船室で感激してたのに。見るんじゃないかったなあ」

露漉「どういうことなんですか？なぜ、彼があんなことに」

琵琶「分かるわけがないだろう！？予想もしていなかった・・・」

露漉「それで彼の容態はどうなんです？」

琵琶「・・・死んだ」

露漉「死んだ！？」

琵琶「・・・即死だった」

慧「マジかよ・・・」

露漉「亡くなる前、何か変わった様子はありませんでしたか？」

琵琶「何も・・・といつても、彼とはこの船に乗ってからの関係で、普段の様子を知っているわけじゃない」

露漉「彼が倒れる前、いったんみなさん、ステージの袖に消えましたよね？あの後、観客の声援に応えるようにステージに戻ってきた。その直後に彼は亡くなったわけだ。何か気が付きませんでしたか？小さなことでもなんでもいい。思い出してみてください」

琵琶「うーん・・・全員袖に入り、汗を拭いたり、スタッフと言葉を交わす者もいたと思う。その後、水が配られて」

露漉「水？その水は全員飲みましたか？」

琵琶「いや、僕は飲んでいない。口をつけないまま、そばにあった小さなテーブルに紙コップを置いた。あの時はたしか・・・水の入った紙コップがお盆に乗せられていて、それをスタッフが、いや・・・違う、紙コップを手渡していたのは・・・鍵斗だ」

慧「鍵斗？ピアノを弾いてた人ですよね？」

琵琶「ああ、そうだ」

露漉「それから？」

琵琶「それから・・・あ！緊張でのが渴いていたらしく、自分の水を飲みほした青島奏季が僕の水も飲んだんだ・・・これ飲んでいいかと、たしかに彼に聞かれた・・・」

慧「なるほど・・・じゃあ、もしかしたら、その水は黒崎さんが飲んでいたかもしれないわけだ」

露漉「いや、そもそもその水は、何者かが黒崎さんに飲ませたかったんじゃないのか？」

琵琶「どういうこと？」

露濤「チェロ奏者の死んだ原因がもし毒殺だったとした場合」

琵琶「毒殺!？」

露濤「もしですよ、もし。もし毒殺だとしたら、死んだ青島奏季さんが二杯目に飲んだ水に毒薬は混入されていた」

慧「そうか、1杯目は何ともなかったんだもんな」

露濤「そしてその毒薬入りの水を黒崎さんに手渡したのは・・・ピアニストの白川鍵斗さん」

琵琶「まさか・・・鍵斗がどうして」

◆第四章

オーナーの部屋。

金城と海原が話し合っている。

海原「本気ですか、オーナー!？本当にこのまま航行を続けるんですか？」

金城「ええ、それしかないでしょう。それが一番いい方法だと思います」

海原「警察にはなんと説明するんですか？最初の寄港地は5日後の台湾ですよ」

金城「遺体はそこで卸して、そのまま旅は続けます。多くの乗客が大金を支払い、このクルーズを心待ちにしていたんです。青島君の事は残念ですが、すべて予定通り進めましょう。幸いにも乗客は青島さんの死を知りません。彼は台湾から帰国の途に就くということにすれば、コンサートは続けていけるでしょう」

海原「他のメンバーが承知しますか？」

金城「黒崎琵琶さんのプロデューサー、成上さんには了解をいただいた。白川鍵斗さんを連れてきたのも成上さんだ。歌手の紅堂くんは元々うちの専属だ。問題ありますか？」

海原「・・・責任は、オーナー自ら取っていただけると判断して、よろしいでしょうか？」

金城「かまいません。全ての責任は私が取ります。あなたは私の言う通りに、この船の舵を取ってくればいい」

海原「・・・わかりました。ただ、ひとつお願いがあります」

金城「なんですか？」

海原「もし事が明るみになり、オーナーが社長を退陣されるような事になった場合」

金城「なった場合？」

海原「新しい社長には、私、海原航進をご推挙いただきたい」

金城「なぜですか？」

海原「私はこの船を誰よりも愛し、誰よりも知っていると自負しています。何があってもこの船を沈めるわけにはいきません。だから、非常の際には私にこの船の行く末をお預けください。それさえ約束していただけるならば、全て、オーナーのご指示に従います」

金城「わかりました。約束しましょう」

海原「お願いします」

部屋に呼ばれた成上が入ってくる。

成上「お待ちせしました。琵琶、入れ」

そして琵琶、鍵斗も入ってくる。

金城「お疲れのところ申し訳ありません。今後の事を話し合ったので、お知らせしておこうと思いましてね」

鍵斗「話し合う？ いったい何を」

海原「演奏を続けていただきます」

鍵斗「馬鹿な。メンバーが一人死んだんですよ？」

海原「ですが乗客は彼の死を知りません」

鍵斗「だったらなんだって言うんだ？」

海原「彼の死は乗客には責任が無いという事です。体調不良に気付けなかった我々、特に私には責任はもちろんあります。ですが、突然の死に対して、誰が予測することが出来たでしょう？ いや、出来るわけがない。だとしたら今、我々にできることはただ一つ。予定通り演奏を続けることです。そうでなければ、責任の無い観客に、コンサート中止という形で責任を押し付けることにはなりませんか？ お金も時間も使って乗船いただいた、乗客の皆さんに対して、船長である私はそんな無責任なことは出来ません！」

鍵斗「……」

そこに露濤と慧が入ってくる。

露濤「殺されたとしたら、どうなんですか？」

海原「……どなたですか？ ここは関係者以外」

琵琶「葉山さん」

成上「知り合いか？ 琵琶」

琵琶「ああ……」

慧「殺人事件かもしれないって言ってるんですよ」

海原「殺人？……馬鹿な、いったい何を言ってるんだ」

金城「あなたたちは？」

露濤「俺？俺はしがない探偵家業をやっています。葉山露濤って言います。こっちは部下の」

慧「誰が部下だ！？ 私は葉山探偵事務のエース、江口慧と申します。身辺調査から浮気調査、行方

不明者の捜索から迷い犬の追跡までありとあらゆるご要望にお応えしますので、はい、これ名刺です、どーもどーも」

露濤「おい、慧、いい加減にしろ、みつともねえ」

慧「馬鹿野郎、細かい営業が大事なんだ」

露濤「慧！」

慧「・・・ちえ」

露濤「失礼しました」

金城「どうして探偵の方々がこの船に。何の調査ですか？」

露濤「ある方に依頼されましたね」

成上「ある方？誰が何の依頼だ？」

慧「それは言えませーん。守秘義務ってやつでして」

露濤「この船で何かやっぱーい事が起きるかもしれない。それを心配されたある方が我々に乗船を依頼してきた。そういうわけです。そしてついに、やっぱーいことが起きちゃったので、登場したわけです」

金城「たしかにコンサートの出演者の一人がステージ上で亡くなったことは、あなたの言葉を借りるなら、やっぱーい事ですが、それを何故、殺人事件だなどと。理由を聞かせてはもらえませんか？」

露濤「いいですか？黒崎さん」

鍵斗「琵琶・・・？」

成上「琵琶、もしかして、依頼主っていうのはお前の事なのか？」

琵琶「ああ、その通りだよ、成上さん」

成上「その通りって・・・いったいお前、何を」

露濤「成上さん、あなた最近、黒崎さんに多額の生命保険をかけましたよね？死亡の際、3億円の」
成上「なぜそんなことを・・・あれは、もし琵琶に何かあった時、家族にお渡しするために・・・やましいことは何もない！」

露濤「本当ですか？じゃあなぜ、受取人があなたなんですか？」

成上「それは・・・わたしが手続きをしただけで・・・最終的にはきちんと・・・ご家族に・・・」

慧「へー、ご家族とも懇意にされてるんですね。さすが名プロデューサー」

露濤「黒崎さんにご家族はいない。すでにご両親とも他界され、黒崎さんは一人っ子で兄弟もいない」

成上「・・・」

露濤「あなたと黒崎さんは最近仕事の事で折り合いが悪い。恩も忘れて自分の元を去られるぐらいなら、いつそ殺して保険金でも手に入れようと思っただんじやありませんか？」

成上「貴様・・・言わせておけば」

琵琶「成上さん。あなたが奏季君を殺したの？本当は僕を殺そうとして」

成上「な、何を馬鹿な事を！私がお前を殺そうとするわけが・・・証拠でもあると言うのか！？いい加減な事を言っていると名誉棄損で訴えるぞ」

露漑 「まあまあ、成上さん、まだ仮定の話なので、そう熱くならないで」

成上 「それにだいたい、私がどうやってステージにいる人間を殺すこと出来るんだ？」

露漑 「そこなんですよ。実はね、カーテンコールの前、ステージ袖でみんなに紙コップに入った水を配った人間がいます」

金城 「水？そこに毒薬でも入っていたと言いたいのですか？」

露漑 「その通り！その中のひとつを、あのチェロ奏者は飲んでしまった。彼が飲んだのは二杯目の水だった。本当は黒崎さんが飲むはずだった水です。その水を配ったのが白川鍵斗さん、あなたです」

鍵斗 「ああ、覚えているよ。確かに水を配ったのは俺だ」

露漑 「つまり」

慧 「つまり、チェロ奏者の青島奏季さんは、黒崎さんの代わりに誤って死ぬことになってしまった。成上プロデューサーには動機があり、ピアノの白川さんには殺害チャンスがあった。そういう事だよな？」

露漑 「お前、一番いいところを・・・」

金城 「んふふふ」

慧 「何、笑ってるんですか？」

金城 「面白い話ですが、すべて憶測だ。くだらない探偵ごっこは、このくらいにして。とにかく、決まったことです。契約通り、残りのコンサート、チェロ抜きで演奏を続けてください。あなたたちもプロでしょう？それから、お願いしていた「魔笛」、次のコンサートでも必ず演奏してください。楽しみにしています」

そこに水良が走り込んでくる。

水良 「オーナー！金城オーナー！」

金城 「どうしたんですか？何か問題でも？」

水良 「大変だ！ディナー中の客がみんな・・・苦しみ出した」

露漑 「何だって!？」

ディナー会場のレストラン。

呻き苦しむ乗船客たち。

駆けつける一同。

慧 「これは！・・・どうしたんだ、いったい・・・」

露漑 「おい、大丈夫か!?だめだ、すでに死んでいる・・・」

海原 「お客様！お客様！・・・こっちもだ・・・何があったんだ、どうしてこんな・・・」

水良 「なぜだ・・・なぜ俺の料理で人が・・・おい、しっかりしろ、目を開ける・・・おい、おい！

目を開けろー！……目を……開けてくれ……」

突然、大きな爆発音が聞こえ、船が揺らぐ。

海原「何事だ！？」

緊急のサイレンが鳴り始める。

無線で機関室に連絡する海原。

海原「第一機関室！応答しろ！第二機関室！……あ、第一機関室か！？なんだ！？どうした、何事だ！？……なんだって！？」

またも大きな爆発。大きく揺らぐ船。

露濤「うわー！」

慧「どうなってんだ、こりゃ」

海原「……オーナー、第二機関室から出火。爆発の原因は不明……浸水しています……」

金城「おかしいな。おい、歌郎、時間のセットを間違えていないか？演奏の一番盛り上がった頃に
と言っておいただろう」

歌手の歌郎が現れる。

歌郎「いけない、また時計が狂ってたようだ。1時間も早く爆発させてしまいました。すみません
でした、オーナー。だけど、毒菓の効き目はバッチリでしたね」

露濤「あれ？歌手の紅堂歌郎さん……銃なんか持って、どうしたんですか？」

パン！と足元に打ち込まれる露濤。

歌郎「動かないでください。これから大事なフィナーレの準備です」

慧「フィナーレの準備？いったい何の？」

金城「我々の人生のですよ」

成上「我々の……人生のフィナーレ？」

金城「ええ。我々と、このエメラルド号の為のフィナーレです」

◆第五章

死体や苦しみがく人々に囲まれたテーブルに座る金城。縛られた海原。銃を向けられて動けない露漉と慧。

琵琶、鍵斗が演奏の位置についている。

金城「それでは初めてください」

鍵斗「始めるって、こんな状況で演奏しろって言うのか？」

金城「もちろんです。そのためにあなた方をお呼びしたんですから」

琵琶「どういう事ですか？説明してください、金城さん」

金城「その前に。お、来た来た」

歌郎「お待たせしました、オーナー。ほら、早くしてよ。あ、スープこぼれる！もう、それでも一流のシェフなの？」

歌郎に銃を突きつけられて、震えながら料理を運ぶ水良。

水良「ああ……すみません……撃たないで……」

歌郎「撃ちませんよ。まだ前菜じゃないですか。メインディッシュ、デザート、最高の料理をすべて提供してもらうまで、殺したりはしません」

水良「私が何をしたというんだ……私はただ料理を作りに来ただけなのに」

金城「何も。あなたはまだ何もしていない。だが、あなたが海原船長と企んでいた計画は知っていますよ」

水良「どうしてそれを……」

歌郎「胸のバッジ。そう、そのセイレーンがあなたと海原船長の会話をゼーんぶ聞かせてくれたよ」

海原「なんだって……」

水良「……私は……私は海原にそのかさされて密輸を手伝うことにしただけだ！信じてくれ、すべてあいつが計画したことなんだ！」

海原「水良、貴様、裏切るのか!？」

金城「やめてください。せっかくの料理がまずくなります」

慧「こんなところでよく飯食う気になるな。あつちもこつちも死体と死にかけて人間だらけじゃねえか……」

金城「だからいいんです。それもフィナーレの準備のひとつですから」

露漉「何をしようって言うんだ？」

金城「沈めるんです。船を」

海原「なんだって!？」

金城「海原。私がお前と妻の聖子が不倫していたことを知らないとも思ってるのか？」

海原「え！？・・・そんなことあるわけないじゃないですか！言いがかりだ！」

金城「今さら嘘をつくな！妻の様子がおかしくなったのは、先代社長、妻の父親が死んでからだ。問い詰めると白状したよ。お前に言い寄られ、いつの間にか深い関係になつてしまったと。お前は先代社長亡き後、船の株式の大半を相続した妻に近づいた。この船を乗っ取るためにな」

海原「馬鹿な・・・じゃあ何故、私を新しい船長に」

金城「この日のためにだよ、海原船長。それから君、前の船長を殺しただろう？」

歌郎「僕あの時、偶然見ちゃったんだ。あんたが前の船長を海に突き落とすのを」

海原「・・・」

金城「素晴らしいアイディアだろう？君と私と、たくさんの乗客とが一緒に、大海原に沈んで死んでゆく。ファイナーレに観客がいなくては寂しいだろう？そうだ、もうひとつ教えておこう。妻も一緒だ。彼女は特別に用意した冷凍コンテナで生きていたところと同じ姿で眠っている。もう息はしていないがね」

海原「殺したのか・・・聖子さんを・・・」

金城「人の妻の名をなれなれしく呼ばないでくれ。ああ、そうだよ、この航海に出る直前に殺してあげた。彼女はこの船が大好きだった。この船でいつか最高の演奏家による船上コンサートを開きたいと言っていた。だから最後の手向けとして準備をしたんだ」

露濤「おかしいな・・・じゃあ、なぜチェロ奏者の青島奏季さんは死んだんだ？あなたが演奏家たちの命を狙う意味は無いように思いますが？」

鍵斗「俺がやったんだ」

慧「え？白川さん、あんたが？」

鍵斗「頼まれたんだよ。成上プロデューサーにね」

露濤「頼まれた？」

鍵斗「俺は長い間、琵琶を憎んできた・・・こいつがいなければ、俺はってね」

露濤「だけど古い友人なんでしょ？」

鍵斗「言ったよな？友達なんかじゃないって・・・俺はいつもこいつに対する劣等感に苦しんでいた・・・おまけに今では琵琶はスーパースターで、こっちは相変わらず安いギャラでこき使われる貧乏ピアニストだ」

慧「だけどあなただって立派に」

鍵斗「そう。立派に真面目に音楽をやってきたよ。だけどそれじゃ駄目な事に気が付いた。売れなきゃ駄目だつてね・・・そんな時、成上プロデューサーが俺に言ってきたんだよ。次は君の番だ。琵琶がこの世から消えれば、君は金も夢も手に出来るってね」

露濤「それで黒崎さんの水に毒薬を。それを青島さんが誤って飲み、死亡した」

成上「待て！勝手に俺を事件の首謀者にするな！俺は何も・・・何も知らない！」

金城「あーははははは！愉快だ！実に愉快だ！まさか私以外にも、復讐心に燃えていた人物がいるとは！素晴らしい！最高のストーリーだ！さあ、宴を始めよう、聞かせてくれ、最高の音楽を！極上のモーツアルトの“魔笛”を！復讐のモーツアルトを！あははははは」

琵琶「復讐の炎は地獄のように我が心に燃え・・・か」

またも大きな爆発音。ゆつくりと船が沈み始める。

海原「くそつ、2等船室まで浸水したな・・・」

金城「海原よ、この船はあとのくらいで沈没するかな？教えてくれないか？」

海原「おそらく・・・もって1時間だ」

金城「十分だ」

琵琶「鍵斗。俺は音楽の事しか知らない、人の気持ちも分からないつまらない人間だ。俺は誰からも好かれるお前の方が、よっぽど羨ましかったよ。今まで、すまなかった。どうやらこれで終わらしい。どうだい？最後に一緒に演奏しないか？」

鍵斗「・・・わかった」

歌郎「それじゃあ、僕も歌わせてもらいます。お二人と一緒に演奏できるならと、オーナーの言いつけに従っていました。僕は喉頭がんなんです。声を失うぐらいなら最高の音楽と一緒に死んだほうが良かったので。ありがとうございます」

琵琶「・・・始めよう」

モーツァルトの魔笛の序曲の演奏が始まる。

徐々に沈んでいく船。

鳴り響き続ける美しい旋律。

その中で一発の銃声。それを追うようにもう一発の銃声。

◆エピソード

騒然とした雰囲気の中。

露濤「遅いんだよ、鹿島さん！」

鹿島「馬鹿野郎！お前が連絡してきてから、この船に追いつくまで2日もかかったんだから仕様がないだろう！？」

慧「だけど、海上保安庁の船から最後に降りてきたのを見ましたよ！なんだからもっさもっさしてさ、緊張感のかけらもなかったすよ！」

鹿島「わりいわりい、俺はめっぼう船に弱くてな。もう気持ち悪くて、いつもの素早い動きがどうにもこうにも・・・」

慧「良く言うわ！あぶなく全員、海の藻屑になるとこだったぜ」

鹿島「だから謝ってるだろうが！助かったんだから少しは感謝しろ！」

露濤「ありがとうございます。でも正直危なかったな。あと少し遅かったら船ごと海底に引きずり込まれるところでしたよ」

鹿島「妻の不倫を許せず、妻を殺し不倫相手に復讐するために船を沈めるなんて正気の沙汰じゃね

え。おまけにこのエメラルド号の経営は破たん寸前で、沈没間際、銃で自殺した金城はほとんどやけっぱちだったんだろうな」

慧「人間の復讐心てのは恐ろしいですね」

鹿島「本当にな」

そこに琵琶音が来る。

露漉「あ、黒崎さん」

琵琶音「すまなかつたね。こんな事になるなんて・・・」

露漉「黒崎さんのせいじゃありませんよ。ただ、なぜかこの船で、2つの違う復讐劇が繰り広げられていた。魔笛の祟りですかね、ははは。お役に立てず、すみませんでした」

慧「つらいですね。信じていた人間二人に、同時に裏切られるなんて」

琵琶音「僕が悪いんだ」

露漉「え？」

琵琶音「僕は今まで気づかないうちに、たくさんの人の気持ちを踏みにじってきたんだと思う。今回、その事に気が付いた。音楽の向上の前に、人間としての成長が先だって、そう思った。良い音楽を作るためには、もつと良い人間にならなきゃいけない・・・」

慧「あの二人はどうなるのかな？」

鹿島「ああ、誤りとはいえ殺人罪だからな。まして主犯は保険金殺人の殺人教唆だ。極刑もあり得るぜ」

琵琶音「刑事さんですか？」

鹿島「ええ。鹿島です。こいつらとは腐れ縁でね」

慧「それはこっちのセリフ！」

琵琶音「鍵斗・・・ピアニストの白川鍵斗なんですが・・・減刑の嘆願とか、出来るものでしょうか？」

鹿島「嘆願か・・・まあ、裁判になればおそらくあなたも証人として出廷することになるでしょうから、その時に情状酌量を訴えたらいいんじゃないですか？確かなことは言えませんが、被害者であるあなたの証言は力になると思いますよ。お友達なんでしょう？彼とは」

琵琶音「・・・ええ。友達です」

露漉「友達か・・・むずかしいな」

慧「少なくとも、この人は違うけどね」

鹿島「なんだ？なに見てるんだ！？あ、そういえばお前ら、この間の焼肉屋の支払い」

慧「やべ、逃げる！」

露漉「了解！」

鹿島「コラ待て！戻ってこい！おい・・・露漉！」

